

身体機能評価学 (旧カリ用)

《担当者名》○坂上哲可 tsakaue@hoku-iryo-u.ac.jp 桜庭聡 齋藤隆司

【概要】

本講義は主にディプロマ・ポリシーに掲げられた「(3)作業療法士として必要な科学的知識や技術を備え、心身に障害を有する人、障害の発生が予測される人、さらにはそれらの人々が営む生活に対して、適切に対処できる能力を身につけている」を満たすため重要な位置を占める。

評価はリハビリテーションを実践していく上で必要不可欠であり、リハビリテーションの全過程において基盤となるものである。前半は骨筋の触診技術及び身体障害系および老年期障害系に関する共通かつ基礎となる検査・測定について学ぶ。後半は中枢性神経疾患、運動器疾患に対する代表的な検査・測定項目について学ぶ。

【学修目標】

一般目標

1. 対象者の立場で検査測定に臨むことができる。
2. 作業療法評価で用いられる各種検査・測定の内容、適用、実施手順、解釈について理解する。
3. 対象者の心理状態について配慮できる。
4. 対象者の全体像をとらえる努力ができる。

行動目標

1. 各種検査・測定を実施する目的・内容について説明できる。
2. 各種検査・測定を正確に実施できる。
3. 検査・測定結果の解釈ができる。
4. 対象者へ配慮した検査・測定ができる。
5. 検査の内容から対象者の全体像をとらえることができる。

【学修内容】

回	テーマ	授業内容および学修課題	担当者
1) 2	骨折・腱板損傷他	整形疾患に必要な検査測定方法を理解する。	桜庭聡
3) 4	体表解剖(骨)	ヒトの体表から触診にて触れられるランドマークを理解し、解剖学で得られた知識と統合させて説明することができる。(作業療法基礎評価学演習第1・2回と同時開講)	桜庭聡 齋藤隆司
5) 6	体表解剖(骨・筋)	上肢・下肢・体幹における主要な骨・筋の触診方法を修得する。	坂上哲可 齋藤隆司
7) 8	体表解剖(筋)	ヒトの体表から触診にて触れられる主要な筋の走行やその働きを理解し、解剖学で得られた知識と統合させて説明することができる。(作業療法基礎評価学演習第3・4回と同時開講)	坂上哲可 齋藤隆司
9) 10	体表解剖(骨・筋)	これまで学んだ骨・筋の体表解剖に関するまとめを行い、関連した演習を行う。	坂上哲可 齋藤隆司
11	まとめ	体表解剖のまとめと確認テスト	坂上哲可
12) 13	形態計測・間隔検査・反射・バランス検査	腱反射の実習を通して、筋の生理的作用とその働きについて説明することができる。 腱反射や病的反射の実習から、その意義を説明することができる。 バランス検査を通して、ヒトに備わっている転倒・転落等から身を守る機能について理解し、適切に検査を実施することができる。(作業療法基礎評価学演習第5・6回と同時開講)	桜庭聡 齋藤隆司
14	STEF	上肢機能検査の目的と方法を理解する。	齋藤隆司
15	関節可動域測定(ROM-t) 1	ヒトの主要な関節の可動域を、再現性を持って計測す	桜庭聡

回	テーマ	授業内容および学修課題	担当者
16		ることができる。 得られた結果の意義、解釈について説明することができる。(作業療法基礎評価学演習第7・8回と同時開講)	齋藤隆司
17 18	末梢神経損傷	末梢神経損傷の病態を理解するとともに必要な検査測定方法を理解する。	坂上哲可
19 20	関節可動域測定 (ROM-t) 2	ヒトの主要な関節の可動域を、再現性を持って計測することができる。 得られた結果の意義、解釈について説明することができる。(作業療法基礎評価学演習第9・10回と同時開講)	桜庭聡 齋藤隆司
21	MFT	上肢機能検査の目的と方法を理解する。	齋藤隆司
22 23	脊髄損傷	脊髄損傷の病態を理解するとともに必要な検査方法を理解する。	坂上哲可
24 25	徒手筋力検査法 1	ヒトの主要な筋の筋力を、再現性を持って計測することができる。 得られた結果の意義、解釈について説明することができる。(作業療法基礎評価学演習第11・12回と同時開講)	桜庭聡 齋藤隆司
26 27	徒手筋力検査法 2	ヒトの主要な筋の筋力を、再現性を持って計測することができる。 得られた結果の意義、解釈について説明することができる。(作業療法基礎評価学演習第13・14回と同時開講)	桜庭聡 齋藤隆司
28 29	ROM-tとMMTまとめ	本科目でこれまで学んだ関節可動域測定及び徒手筋力検査法についてまとめ、臨床に即した演習を行う。	桜庭聡 齋藤隆司
30	まとめ	本科目でこれまで学んだ基礎的な評価の主義・知識を統合し、臨床実習に向けて総合的な演習を行う。(作業療法基礎評価学演習第15回と同時開講)	桜庭聡 齋藤隆司

【授業実施形態】

面接授業

授業実施形態は、各学部(研究科)、学環、学校の授業実施方針による

【評価方法】

定期試験(筆記試験)100%

【教科書】

矢谷 令子 他 編 「作業療法評価学(第3版)」 医学書院 2017年
 Helen J 他 著 「新・徒手筋力検査法(第10版)」 協同医書出版 2020年
 伊藤 俊一 他 編 「PT・OTのための測定評価1 ROM測定」 三輪書店 2023年
 田崎義昭 他 著 「ベッドサイドの神経の診かた(改訂18版)」 南山堂 2016年

【参考書】

佐竹勝 編 「作業療法学ゴールドマスターテキスト 作業療法評価学」 メジカルビュー社 2022年
 Joseph E.Muscolino 著/日高正巳 監訳 Dr.マスコリーノ 「Know the Body 筋・骨格の理解と触診のすべて」 医歯薬出版 2014年
 Thomas Platz 他 著 藤原俊之 監訳 「上肢リハビリテーション評価マニュアル」 医歯薬出版 2013年
 潮美泰蔵 他 編 「PT・OTビジュアルテキスト リハビリテーション基礎評価学」 羊土社 2019年
 林 典雄 著 「運動療法のための機能解剖学的触診技術 上肢 改訂第2版」 メジカルビュー社 2011年
 Karen Schultz 著 中田真由美 訳 「シュルツ・上肢の痛みの評価法」 協同医書出版 2003年
 日本作業療法士協会 監修 「作業療法学全書3 作業療法評価学」 協同医書出版 2020年
 鎌倉矩子 他 著 「手を診る力をきたえる」 三輪書店 2013年

【学修の準備】

覚えなければならないことが多い科目である。また、解剖学や生理学、運動学など既習のリハビリテーション基盤科目とのつながりも強い科目であることを念頭に置くこと。実施された小テスト結果についても必ず再学修すること。

予習は次回の内容をシラバスで確認した上、授業範囲の教科書を読んで理解しておくこと(80分)。

復習は教科書、配布資料などを活用し、学修を深めること(80分)。

【ディプロマ・ポリシー(学位授与方針)との関連】

(DP3) 作業療法士として必要な科学的知識や技術を備え、心身に障害を有する人、障害の発生が予測される人、さらにはそれらの人々が営む生活に対して、地域包括ケアの視点から適切に対処できる実践的能力を身につけている。

【実務経験】

坂上哲可(作業療法士)、桜庭聡(作業療法士)、齋藤隆司(作業療法士)

【実務経験を活かした教育内容】

病院での多くの疾患の治療経験をもとに、知識のみならず技術的指導も時間をかけて丁寧に指導する。

【その他】

この科目は主要授業科目に設定している